

第 24 回日本放射線安全管理学会 印象記

北 実
Kita Makoto

冬の冷たい空気の中にも穏やかな日差しが注ぐ中、2025年12月15～17日の3日間、日本放射線安全管理学会第24回学術大会が、京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールで開催されました。百周年時計台記念館は、1925年に建てられた時計台を2003年に最新の免震工法を取り入れて改修した施設で、歴史を感じさせる重厚な雰囲気を纏いながら、快適な会場でした。

開会式では、大会長の京都大学・角山雄一先生がごあいさつに立たれ、日本保健物理学会の研究発表会と日程が近接したことによる参加者の分散や、今回は口頭発表を1室で進行することになったためスケジュールがタイトになったことに対する懸念に触れられました。しかし3日間を振り返ると、用意された席はすっかり埋まる大盛況、それでいて運営スタッフの綿密な準備、座長の的確な進行、そして発表者・聴講者の協力が見事にかみ合い、時間どおりのスムーズな進行が保たれていました。むしろ1室開催であったからこそ、すべての参加者がセッション全体の流れを共有する一体感が生まれていたように感じられました。

大会は、旬の話題と普遍的で不朽のテーマがバランスよく組み込まれていました。旬の話題として注目を集めたのは、やはりX線関連の法改正でした。国立七大学安全衛生管理協議会X線管理WGの活動報告では、電離則改正に至るまでの厚労省担当官との議論も紹介されました。本学会は放射線取扱主任者の比率が高く、従来は「X線」は隣接分野という印象もあったかもしれませんが。しかし実務では、放射線とX線の法的な区別を厳密に理解しないまま相談を受ける場面も多く、結果としてX線の管理

にも携わる方が増えてきているように感じます。本テーマへの関心の高さからも、現場ではX線管理への参画の必要性が年々増していることがうかがえました。

特別講演「エックス線装置に係る放射線障害防止対策の最新の動向について」では、労安法・電離則の基本構造から最新の改正点までが整理され、実務に落とし込む際の具体的な考え方が丁寧に示されました。質疑応答では、すぐに結論の出ない複雑な事案もあり、現場が抱える課題が年々多様化していることを改めて感じました。また講演終了後には、納得の表情を浮かべる参加者が多く、本講演が会員にとっていかに有益であったかが感じられました。

また数は多くありませんでしたが生成AIに関する話題が出てきたのも今期の特徴の1つだったのではと思いました。安全取扱に関する内容として、予防規程の見直し等、具体的な場面でAIを利用した事例が紹介されました。施設固有の情報を十分に与えればある程度の提案が得られる一方、前提条件が不足すれば誤りが増えてしまうというAIの前提依存性が示され、有益性を示しつつも、実務導入には慎重な判断が必要であることが述べられていました。その他AIと直接関係があったわけではありませんが、教育セッションでは「教材プログラム作成にAIを利用したか」という質問も出ており、多くの参加者が日常業務の中でAIをどのように扱うべきかを模索している様子が見受けられました。AIはまだ手探りの段階ではありますが、確実に放射線安全管理の領域にも入り込んできていることを実感しました。

更に、LED照明の放射線による損傷も旬な話題

の1つでした。加速器施設でLED照明が光子や中性子により故障する可能性があることが紹介され、会場からは「医療用リニアックでも起こり得るのか」といった声も聞かれました。蛍光灯の製造・輸入が終了し、LED化が急速に進む中で、放射線環境下ならではのLED化に伴う問題点という新たな視点を提示する非常に興味深い内容でした。筆者自身、この話題は初耳で、学会で得られる知見が放射線安全管理と密接につながっていることを強く感じました。

一方で、セッション「安全取り扱い及び安全管理に携わる現場での貴重な経験等」での事故・トラブル事例の共有は、放射線安全管理における普遍的なテーマといえるでしょう。日本放射線安全管理学会教育訓練検討委員会が進める「ヒヤリハット情報提供フォーム」を通じた事例収集は、法令報告に至らない出来事の背後に潜むリスクの芽を認知し、安全管理の底上げにつなげる大変重要な取り組みだと感じました。近年はRI利用件数の減少と共に事故も少なくなっているように感じますが、同時に経験豊富なユーザーや管理者も減少しており、これまで施設内で自然に共有されていた経験を学会として集約・共有していく重要性はむしろ高まっているように思いました。

本学会の「背骨」とも言える放射線計測・放射能測定に関するセッションは、測定技術や評価手法に関する演題が毎年数多く並びます。今回も検出器や評価法の開発・改良、実務現場の課題を踏まえた検討等、王道ともいえるテーマが数多く扱われていました。技術の地道な積み重ねが、安全管理の信頼性を支えていることを再認識させられました。

また、教育・社会的啓発活動・リスクコミュニケーションにも多くの演題が集まりました。これまでの放射線安全管理学会を振り返ると、第1回学術大会では放射線業務従事者教育訓練に関連した発表がポスターに数題みられた程度でした。しかし第2回では専用セッションが設けられ、その後は回を重ねるごとに領域が拡大し、今では「安全教育」、「リスク

コミュニケーション」といった広い視点を含む分野へと成長しています。今回は放射線教育にICT教材等、新しい技術を取り入れる試みが紹介され、学会が長く育ててきた教育・啓発の分野が、時代と共に更新されていることを感じました。

更に今回は、中学生(3題)、高校生(3題)がポスターセッションで発表を行ったことも特筆すべき点でした。若い世代が学会に参加し発表する姿は、社会啓発という意味だけでなく、筆者ら会員にとっても社会の視線を強く意識する貴重な機会になりました。筆者自身も彼・彼女らから質問を受け、身の引き締まる思いがしました。

懇親会は、2日目の夜、ハイアットリージェンシー京都で開催されました。荘厳な雰囲気の中で、角山先生と生成AIを用いた即興の“掛け合い”で始まり、会場は大いに和みました。途中、角山先生が撮影された京都のドローン映像が上映され、その美しさに参加者から大きな拍手が起きました。料理やお酒も評判どおり美味しく、量も豊富で、あちらこちらで談笑の輪が広がっていました。こうしたあたたかい交流の場も、本学会の大きな魅力の1つではないでしょうか。

3日間を通して、今回の大会は現場の課題を率直に共有し、一緒に考えるという本学会の原点が、非常に明確に表れていたように思います。X線に関する法改正という変化に向き合いながら、AIやLED照明の放射線損傷といった新しいテーマにも積極的に踏み込み、同時に事故分析や教育といった普遍的な取り組みも継続されるという、奥行きのある大会となりました。

今回得られた知見や交流が、今後の施設運営や研究活動の向上に生かされ、わが国の放射線安全管理をより確かなものへとつなげることを期待しています。次回第25回学術大会は高松市で2026年12月9～11日に開催予定です。また皆さまとお会いできることを楽しみにしています。

(鳥取大学 研究推進機構)